

白米がわき出た泉（いずみ）米谷の伝説

～わたしたちの東和町より～

それはいつのころからかわかりませんが、むかし、今の米谷が前谷（まいや）村と呼ばれていたころのお話です。

そのころ、今の町より五町（約500メートル）ぐらい東に行った山沢（やまさわ）の山居（さんきょ）にひとりの坊さまがどこからともなく来て生活していたそうです。そのうちに坊さまの数が5人、6人とふえてきたそうです。

ところが、坊さまたちはまったく托鉢（たくはつ）などをするようすもありません。それで里人たちはどのようにして生活をしているのかふしぎに思い、数人でようすを見にでかけました。

するとどうでしょう。

山居の岩の間に、泉がわき出ているところがあったのですが、その泉から水ではなく、白米がわき出ているではありませんか。そして坊さまたちはそれを取り上げて、朝夕のご飯にして食べていたことがわかりました。里人たちはたいへんおどろいてしまいました。

この話がだんだんと村中に知れわたり、里人たちもその白米をわけてもらい食べたそうです。

そこで村の主だった人々が集まり、相談して白米のわき出ているところに「米谷山福源寺（まいやさん ふくげんじ）」というお寺を建て、先からいた坊さまを住職としたそうです。

米谷山福源寺は、その後どうなったかわかりませんが、その寺あとに大光寺（だいこうじ）というお寺ができたそうです。

その大光寺が柴田郡船岡（しばたぐんふなおか）に移っていったあとに、今の東陽寺（とうようじ）ができたといわれています。

托鉢（たくはつ）・・・お坊さんが修行のため、鉢（はち）をもってお経を唱えながら家々

を回って米やお金のほどこしを受けること